

序

古野東洲先生停年退官記念号の刊行にあたって

古野東洲先生は、昭和29年に林学科を御卒業になり、その後も造林学教室の大学院生として、また、演習林教官として今日まで森林保護学の研究に携わってこられた。また、一方で和歌山演習林や上賀茂試験地の代表者として、演習林の運営にも長年深くかかわってこられ、演習林の発展に多大の貢献をされた。しかし、平成7年3月をもって停年御退官される。

ここに掲載される2編の研究報告は、先生の幅広い御研究課題の中でも常に先生が中心に据えてこられた「林木の生育に及ぼす食葉性害虫の影響」という課題についての報告である。森林保護学の中心課題である食葉性害虫はまさに先生の御研究のキーワードの一つであると言っても過言ではない。マツカレハの被害に始まって、クスサン、マツバノタマバエ、現在社会的な問題となっているマツ枯れ被害などを幅広く御研究対象とされてきた。この種の研究には幼虫の摂食葉量や脱糞量まで正確に計測する必要がある。とくに脱糞量から摂食葉量を推定する方法、及び食葉性害虫が林木の生育に与える影響を人為的に葉を摘むことによって明らかにする方法は、先生のオリジナルであり日本林学賞の対象となったものである。これらの仕事を多忙な演習林業務のかたわらこなし、その輝かしい珠玉の成果を研究報告として数多く学会誌上などに発表しておられるが、京都大学演習林の刊行物に掲載されるのはおそらくこれが最後になる。

先生が担当してこられた森林保護学は、現在のところ後継者が定まっていない。林学の世界では数少ないもっとも優秀な森林保護学の専門家である。その意味でも演習林だけでなく、林学教室にとってもかけがえのない重要な教官である。今後もこの世界の研究御指導をいただけることを期待してやまない。

平成7年3月

京都大学演習林長
教授 神 崎 康 一